

同じような内容の「言い換え」に注意してみよう

例題 D 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

- ① 日本の芸術論を見ますと、表現者——芸術家が、きわめて強く他人を意識し、同時に、表現している自分というものを意識していることがわかります。② 芸術は自己表現という側面を持つのですから、芸術家は自分を意識して当然であるといえますが、日本の場合には、その自分が他人にどう見えるかということ、きわめて強く意識しているのです。
- ② 話が機微に触れてきますが、芸術家というのは、自分を表現することによって、ある種の満足を感じています。それは何らかの意味において、彼の自我が他人の前で拡張されるからです。もつと汚い言葉を使っているならば、どんなにつつましい芸術家といえども、表現するということは、何らかの意味において自己を見せびらかすことであり、自己顕示の行為であります。もつともそれは単純な自己顕示ではないので、そこに表現される自己というものは、なまの自己ではなくて、多くの芸術的な訓練、あるいは修練によって変形された自己だといえます。
- ③ しかしながら、なおかつそこに自分の拡張、あるいは顕示という要素があることは事実なので、これが表に強く出てきますと、それを見せられる他人は当然

〔出典〕
山崎正和
『生存のための表現』

2

10

5

3

- ③ カイな思いをするわけです。
- ③ わかりやすい例を挙げますと、よくお芝居で、「あの人はうまいけれども、臭い演技をする」という言葉があります。臭い演技をする人が下手な演技者であるとはいえないので、むしろ技巧的にはきわめてうまいのです。うまいにもかかわらず、どこが悪いのかというと、その技巧的な成果以上に、彼の自己顕示が表にちらつくことであり、平たくいえば、どうだ、うまいだろう、どうだ、この工夫は面白いだろう、というひそかな意識が目につくわけです。いかにもやっているぞ、やっているぞ、というその感じが鼻につくということになります。これは当然、洋の東西を問わず見られる現象ですが、日本の芸術家は、不思議にこの自己関係の機微に驚くほど意識的であるようです。そしてこの鋭い自意識、つまり自己拡張が表に出ることを警戒する意識が、そのまま一つの芸術論にまで高まっている例が見られるのです。

15

20

25

30

例題 D

- ④ 一例をいいますと、むかしから日本の短歌の世界では、心と詞（言葉）の釣り合いということが繰返し考えられています。その場合、短歌というものは、心が余って詞が足りないのがよろしい、というのが大多数の意見であります。もちろんこれには本居宣長のようないかなる有力な反論もあるのですけれども、あまりうるさくありませんので、そのへんはハブきます。要するに、心がたっぷりしていて、詞が足りないぐらいのもの、これを余情といいますが、その余情のあふれたものがい

44

a

b

c

d

[illegible]

45

50

信

問三 傍線部2「臭い演技をする人」とは、どのような人か。次の中から最も適切なものを一つ選び、記号で答えよ。

イ うまく演じようとする**技巧**が目立ちすぎ、逆に下手な演技に陥っている人。
ロ 自分の身につけている能力以上の技巧を見せつけようとしている人。

ハ
技巧というものに対する理念を、芸術論にまで高めようとしている人。

二 技巧を越えた技巧におぼれるあまり、表現すべき自己がなくなった人。

ホ 技巧的には優れていても、表現における自他関係の機微に無自覚な人。

問四 傍線部「短歌というものは、心が余って詞が足りないのがよろしい、というのが大多数の意見であります」とあるが、「詞が足りないのがよろしい」という「意見」は、「短歌」についてのどのような考え方にもついているのか。その考え方を、本文中の表現を用いて四十文字以内で述べよ。

[illegible]

問五 空欄 A [] D には 詞 か 心 のいずれかが入る。「詞」が入ると思われる場合は 1 「心」が入ると思われる場合は 2 を、それぞれ選んで答えよ。

A ☐

B ☐

C ☐

D ☐

すべては仮説

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 新聞を読んでいると、コメントという奇妙なものを眼にすることがある。大きな政争や事件が起きた時などに、「識者の意見」とかいう名のもとに、力^aがけられる、あれだ。このような国民不在の総裁選にはうんざりさせられる、とか、この事件の責任は犯人の少年ばかりでなくそれを許した周囲にもある、とか、一昔も前からほとんど変わっていないようにない紋切型の意見が、器用に数行に要約され載っている。変わらないことが悪いというわけではない。いつの時代にも妥当する正しい意見というものが、あるいは存在するのかもしれない。ただ、大学教授、評論家、作家といった人々から、何をしているのかは知らないがとにかく有名ではあるといった人々に到るまで、およそ彼らが発しているコメントなるものを読み、心の底から納得させられることは稀^{まれ}だというだけの話である。

② 時として、こういう風の吹きまわしか、私のところにもコメントを求める電話がかかってくることもある。だが私は、たとえそれが新聞であろうと雑誌であろうと例外なく断つてしまう。同じジャーナリズムの現場にいる者として断るのは辛い^づが、だからといって引き受けるわけにはいかない。別に、自分の喋^{しゃべ}ったことが正確に伝わらないからとか、記事の中で、ユガめられてしまうからというのが理由ではない。要するに私にはわからないのだ。その事件がどうして起きたのか

〔出典〕
沢木耕太郎 さわきこうたろう
『私にわかつていることは』

〔著者出題歴〕

- ・筑波大学
- ・早稲田大学
- ・立教大学
- ・学習院大学
- ・日本大学
- ・聖心女子大学
- ・京都産業大学
- ・広島修道大学

46